

〔研究論文〕

中古文学に見られる「心の鬼」

— 散文作品を対象として —

鈴木健太郎

中古散文作品における「心の鬼」は、複数の意味が併存するという説と、包括的に、あるいは一義的にとらえようとする説に分かれている。しかし、未だに、中古散文の全用例を詳細に分析した研究は、管見では確認できない。

そのため、本稿では、複数の意味が併存するという説を受けて、中古文学作品のうち、散文の、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『源氏物語』、『浜松中納言物語』、『夜の寢覚』、『栄花物語』の6作品に見られる全24例がそれぞれ、「疑心暗鬼」と「良心の呵責」の二つの意味のうちどちらに当てはまるか、検証・再検証を行い、その傾向を分析する。

分析の結果、「疑心暗鬼」として解釈できるものが9例、「良心の呵責」として解釈できるものが15例あった。この傾向を見ると、「良心の呵責」の方が若干多いが、どちらもそれなりに存在しているということになった。また、作品ごとの意味の偏りはなかった。

キーワード：心の鬼 中古文学 蜻蛉日記 枕草子 源氏物語 浜松中納言物語
夜の寢覚 栄花物語

I、はじめに

中古文学に見られる「心の鬼」という語は、これまでも研究がなされており、登場人物の心情を表す、中古文学において非常に重要な語の1つとされている。しかし、この語の解釈は以下に示す『日本国語大事典 第二版』^[1]のように複数の意味が併存するという説と、包括的に、あるいは一義的にとらえようとする説に大きく分かれている。

2002年に刊行が完了した『日本国語大辞典』で「心の鬼」の意味を確認すると、次のように記されている。

- (1)心を責めさいなまれること。ふと心をよぎる不安や恐れ。
 - (イ)心の中で疑い恐れること。疑心暗鬼。取越し苦労。
 - (ロ)心にかねて恥じ恐れていたことに直面してはっと思うこと。気が咎めること。良心の呵責。
- (2)心の奥に隠れている、よくない心。よこしまな心。邪心。

中古文学の研究においては、江戸時代の本居宣長^[2]が(1)イ「疑心暗鬼」の意味であるとしたのをはじめとして、(1)ロ「良心の呵責」との2つの意味が存在することが指摘されてきたが、その一方で、「心の鬼」を1つの意味に定義しようとする研究の流れがあった^[3]。

まず、包括的な意味を追求しようとするものに、『日本国語大辞典』の刊行より10年ほどさかのぼる1990年に発表された田中貴子「「心の鬼」考」^[4]がある。田中氏は「人の心の中に邪悪な部分を意識し、それを鬼になぞらえているという精神作用」としつつ、「疑心暗鬼」「良心の呵責」の両方の解釈を否定はしない立場を取っている。また、『日本国語大辞典』の刊行中に発表された森正人「心の鬼の本義(承前)」^[5]は、包括的に「王朝人は、自らの「隠しておきたい心」を見つめ、目に見えぬ隠れ籠る鬼になぞらえて「心の鬼」と名付けた」としている。さらに、2012年の赤間恵都子「「心の鬼」の解釈について—王朝文学の心情表現—」^[6]は、自分自身を責める「良心の呵責」と、相手を疑う「疑心暗鬼」は正反対の心の動きであり、同時にこの2つの解釈があることは納得がいかないとして、「心中に隠した思い」としている。

この研究の流れに対して、2013年に発表された杉浦和子「源氏物語における「心の鬼」—「人を責める鬼」から「己を責める鬼」の物語へ—」^[7]は、「源氏物語における「心の鬼」の15例は、直訳すれば、すべて「人知れぬ罪悪感」としてもよい」としており、『源氏物語』に限定するとはいえ、「心の鬼」を『日本国語大事典』(1)ロの意味に一義的に決定的できるとしている。

これら、包括的、一義的に解釈することを提唱するものに対して、2016年井内健太「『源氏物語』藤壺の密通における「心の鬼」について」^[8]は、「心の鬼」=疑心暗鬼の意味であることは一定の支持を得ているとしながらも、「良心の呵責」の意もあてはまり、一義的に決定することは難しいとしている。つまり、『日本国語大辞典』(1)イとロの2つの意味が併存するとしている。

本稿では、この井内氏の指摘を受けて『源氏物語』の用例を含めた中古文学作品のうち、散文の全用例について検証・再検証し、実際にどの用例が(1)イ「疑

心暗鬼」で、(1)口「良心の呵責」なのかを1つずつ確認し、その傾向を分析することを目標とする。このように、中古散文の全用例について詳細に分析して全データを公開した研究は管見ではないからである。なお、韻文作品を網羅したものには佐藤雅代「「心の鬼」考—歌言葉としての一側面—」^[9]があるため、本稿では韻文作品は扱わなかった。

II、用例分析

ジャパンナレッジでの掲載順に、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『源氏物語』、『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』、『栄花物語』で使用されている「心の鬼」という語、全24例について分析する。本文の引用は全て、『新編日本古典文学全集』^[10]からである。

まず見ていくのは、『蜻蛉日記』の用例である。

- ① 暗う家に帰りて、うち寝たるほどに、門いちはやくたたく。胸うちつぶれて覚めたれ、ば思ひのほか、さなりけり。心の鬼は、もし、ここ近きところに障りありて、帰されてにやあらむと思ふに、人はさりげなけれど、うちとけずこそ思ひ明かしけれ。つとめて、すこし日たけて帰る。さて、五六日ばかりあり。
(『蜻蛉日記』下291頁)

ある晩、家で寝ていた道綱母のもとに、夫の兼家が帰ってきた場面である。兼家は以前から近くの女の所に通っており、家に帰らないこともしばしばあった。そのような中で、めったに帰ってこない兼家が、めずらしく帰ってきて、道綱母も驚いているのが「思ひのほか、さなりけり」の部分からも分かる。道綱母からすると、もう帰ってくるはずのない兼家が帰ってきたのは何か理由があるのだろう、ということで、近くの女に帰されたから今夜は仕方なく帰ってきたのだろうと推測する。そこに生まれた「心の鬼」というわけである。これは、道綱母の兼家に対する「疑心暗鬼」の念と考えて良いだろう。

次は、『枕草子』の用例である。

- ② 「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、えほめたてまつらざらむが、くちをしきなり。上の御前などにても、やくとあづかりてほめきこゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、言ひにくくなりはべりなむ。」
(『枕草子』129「故殿の御ために、月ごとの十日」243～244頁)

藤原^{ただのぶ}齊信(967—1035、平安時代中期の公卿)に、私ともっと親しくなっ

てほしいと言われたことに対する、清少納言の言葉である。もし深い仲になれば、帝の前などで斉信のことを褒めづらくなってしまうと、彼女は述べている。この「心の鬼」を「良心の呵責」とする注釈書^[11]もあるが、本稿では、「疑心暗鬼」の意ではないかと考える。なぜなら、「心の鬼」という語を修飾する形で、「かたはらいたく」という語が使われているからである。つまり、「心の鬼」は、「良心の呵責」よりも、周りの目が気になるという「疑心暗鬼」の意味を含んだものと考えられる。

ただし、森正人氏^[12]はこの部分について「出で来」に注目し、「かたはらいたく」との関連から、「心の鬼」を普段は隠れているもの、隠しておくべきものであると解釈している。また、「心の鬼」はすでに心の中に存在しているという旨を述べているが、「かたはらいたく」で、周りの目を気にする旨の表現をしたのであれば、わざわざそれが心中に隠していた思いであると描く必要はなく、「心の鬼」という語を用いずに「かたはらいたく、言ひにくくなりはべりなむ」とそのまま書けば良いように考えられる。むしろこの「出で来」は、「(今までなかったものが)発生して」と解釈するのが妥当であり、「かたはらいたく、心の鬼出で来て」は、「そばの人に対して気が引け、疑心暗鬼の念が発生してきて、」と解釈ができないであろうか。以上のことから、この「心の鬼」は、「疑心暗鬼」と考える。

ここから、『源氏物語』に出てくる15例を見ていく。まずは「紅葉賀」巻の例である。

- ③ 「むつかしげなるほどなれば」とて、見せたてまつりたまはぬもことわりなり。さるは、いとあさましうめづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく、人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりをまさに人の思ひ咎めじや、さらぬはかなきことをだに疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか、と思しつづくるに、身のみぞいと心憂き。

（『源氏物語』 紅葉賀巻 ①326頁）

生まれた若宮の顔が光源氏そっくりで、光源氏との間にできた子なのだと、藤壺が実感している場面である。源氏との密通の件から「良心の呵責」とも捉えることができる用例ではあるが、本稿では、「疑心暗鬼」と解釈する。なぜなら、藤壺の「御心の鬼」の出現の描写の後に、「人の見たてまつるも……身のみぞいと心憂き」という、藤壺の世間を気にする心情が、ある程度長く描かれているからである。源氏との密通直後から、ここまで罪の意識に苛まれ続けているのを前提として、若宮の顔を見て、世間の目が気になり恐ろしく感じてきたというのを、

「心の鬼(疑心暗鬼)」の出現として表現していると考えるのが妥当ではないだろうか。

次は、「葵」巻の用例で、六条御息所が、源氏からの手紙を読んでいる場面である。

- ④ 里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいとみじ。

（『源氏物語』 葵巻②52頁）

源氏からこれ以上自分に執着するのはやめてほしい趣旨の歌を送られ、葵の上に憑りついたのはやはり自分であったということを示唆されていることに六条御息所は気づいている。この「心の鬼」は六条御息所の「良心の呵責」であると考えられる。そもそも六条御息所は、自分が葵の上に物の怪として憑りついているのを薄々感じていた（『源氏物語』 葵巻②35～37頁）。

車争いの一件で、葵の上に恨みを持った六条御息所は、自分の魂が生霊として葵の上のもとに現れる可能性を危惧している。葵の上に対し、暴力を振るっている夢も見ていることから、六条御息所の思いの強さが伺える。彼女はこのことから罪の意識に苛まれている。この意識が元々あったため源氏に葵の上の件をほのめかされて、「良心の呵責」から、はっきりと分かったのである。赤間恵都子氏^[13]は、この「心の鬼」を「良心の呵責」と解釈すると、後の「さればよ」への繋がりが上手くいかないとしているが、この部分は、元々感じていた「良心の呵責」から、はっきりと分かった六条御息所が「やはりそうだったのか」と、結論付けているのであり、むしろ自然な繋がりと考える。

以上のことから、この「心の鬼」は、「良心の呵責」であると解釈する。

続いて、「賢木」の巻で、源氏が頭弁^{とうのべん}（源氏と敵対する右大臣の孫）から謀反をほのめかされたことを思い出し、気に病んでいる場面を見る。

- ⑤ 大将、頭弁の誦じつることを思ふに、御心の鬼に、世の中わづらはしうおぼえたまひて、尚侍の君にもおとづれきこえたまはで久しうなりにけり。

（『源氏物語』 賢木巻②127頁）

頭弁が、源氏に対し詠んだ漢詩は、同巻125頁の「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」のことである。『新編日本古典文学全集』の注には、この「心の鬼」は朧月夜との密通に関する心のやましさとしているが、ここは文章を文字通りに読めば、直前の部分を受けており、謀反を疑われていることから生まれた「心の鬼」であると考えられる。

社会が自らをどのように扱うか不安が募ってきたため、朧月夜との危険な密通も自然に久しくなっていたのだと考えると、後文への繋がりもスムーズである。つまり、この「心の鬼」は、朧月夜との密通におけるやましきから発生したものではなく、むしろ、朧月夜との密通を避ける1つの理由となっていると考えられる。そのような理由とは、前述の通り、社会に対する不安であり、それは「疑心暗鬼」として源氏の心に生じたものである。以上の理由から、この「心の鬼」は「疑心暗鬼」と考えられる。

次の用例は、「明石」巻で、明石の君と関係を持った源氏から、明石の君のもとへ後朝の手紙がこっそりと届けられた場面である。

- ⑥ 御心ざしの近まさりするなるべし、常は厭はしき夜の長さも、とく明けぬる心地すれば、人に知られじと思すも心あわたたしうて、こまかに語りひおきて出でたまひぬ。御文いと忍びてぞ今日はある。あいなき御心の鬼なりや。
(『源氏物語』 明石巻②258頁)

この「心の鬼」は、「疑心暗鬼」として解釈する。直前の「人に知られじと思すも心あわたたしうて」から、源氏はとにかく人の目が気になっているのである。そこからの、「御文いと忍びてぞ今日はある」は、人の目に対する「疑心暗鬼」からの行動と言って良いだろう。

次の用例は、「朝顔」巻で、源氏が藤壺の法要を考えるが、世間と帝の目を気にして、法要を開催するのを躊躇っている場面である。

- ⑦ かの御ためにとりたてて何わざをもしたまはむは、人咎めきこえつべし、内裏にも御心の鬼に思すところやあらむ、と思しつつむほどに、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。同じ蓮にとこそは、なき人はしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむと思すぞうかりけるとや。
(『源氏物語』 朝顔巻②496頁)

亡くなった藤壺が夢に出てきて、恨み言を言われた源氏は法要の開催を考えるが、そのようなことをすると、自分と藤壺の関係について、世間や冷泉帝に不審に思われるのではないかと源氏は危惧している。この「御心の鬼」について、湯浅幸代氏^[14]は、この「御心の鬼」から想像されることとして、具体的に、出生の秘密を知った時から冷泉帝の心に住み着いた「即くべきでない帝位にある自分のために、故桐壺帝や母宮の往生が妨げられてはいないか、実の父を臣下としていたわしく畏れ多いことである」という気の咎めであり、「良心の呵責」として、解釈している。確かに、出生の秘密を知った冷泉帝がそのような

気持ちを持っているのは確かであり、譲位をしようとした行動からもそれは読み取れる。しかし、この場面はあくまでも源氏が、冷泉帝の心中を推測しているものであるため、源氏がそこまで推測できる状態であったのかということが問題である。冷泉帝が良心の呵責を感じるのではないかと源氏が推測するためには、冷泉帝がすでに源氏と藤壺の関係を知っていることを、源氏が把握していなければならぬ。実際、源氏は、冷泉帝から譲位の話聞き、自分と藤壺の関係を気づかれたかどうか心配になり命婦に問い詰めるが、確証は得られていない。

これらのことを含めて、⑦の場面をもう一度見てみると、湯浅氏の述べているように冷泉帝の心中を源氏が推測するのは、多少難しいように考えられる。

したがって、この場面では、藤壺の法要の開催により、冷泉帝の心に「疑心暗鬼」が生じるのではないかと源氏が推測して、法要を取りやめたと考えるのが妥当ではないだろうか。

さらに、「少女」巻で、夕霧が、雲居雁を訪ねて、内大臣の車を見つけた場面を確認する。

- ⑧ をりしも冠者の君参りたまへり。もしいささかの隙もやと、このごろはしげうほのめきたまふなりけり。内大臣の御車のあれば、心の鬼はしたなくて、やをら隠れて、わが御方に入りゐたまへり。内の大殿の君たち、左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参り集ひたれど、御簾の内はゆるしたまはず。（『源氏物語』 少女巻③52～53頁）

夕霧と雲居雁の関係を知って怒り、2人を引き離そうとしている内大臣の話が大宮から聞いた夕霧は、悲しみを覚える。小さな頃から2人で遊んできた彼らであるが、内大臣の、「従兄妹同士は結婚させない」という考えにより会うことを拒まれてきた。相手方の親から拒まれているにも拘わらず、隠れながらも会いに来た夕霧は、少なからず罪の意識があるのであろう。これは、夕霧の「良心の呵責」であると考えられる。

次に、「常夏」巻で、玉鬘への訪問を思いとどまる源氏の気持ちが描かれている場面を見る。

- ⑨ 渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり答むべきほどは、心の鬼思しとどめて、さるべきことをし出でて、御文の通はぬをりなし。（『源氏物語』 常夏巻③234頁）

このすぐ後の場面を見ると、源氏は、1日中玉鬘のことが頭から離れないが、訪問を続けていると、世間から悪いように言われることを分かっており、自分の

ことはともかく、玉鬘が悪く言われてしまうことの方を気にかけているようであり、罪の意識を感じているのが分かる。以上の理由から、この「心の鬼」は「良心の呵責」であると考えられる。

続いて、次の用例は、「若菜・上」巻で、紫の上が周りの女房達に気を使い寝られなくなっている場面である。

- ⑩ あまり久しき宵居も例ならず、人や咎めむ、と**心の鬼**に思して入りたまひぬれば、御衾まゐりぬれど、げにかたはらさびしき夜な夜な経にけるも、なほただならぬ心地すれど、（『源氏物語』 若菜・上巻④67～68頁）

光源氏と女三の宮の結婚3日目の夜、紫の上は気丈に振舞おうとするが、なかなかそうもいかない。その様子を自分の女房達に悟られたくない紫の上の葛藤が描かれている。この場面は、夜遅くまで起きていると、周りの人に変に思われないうかという、紫の上が「疑心暗鬼」になっている場面と言って良いだろう。

次の用例は、「若菜・下」巻で、女三の宮が、柏木との密通が原因で、見舞いに来てくれた源氏に対して気が引けている場面である。

- ⑪ 宮は、御**心の鬼**に、見えたてまつらんも恥づかしく思すに、ものなど聞えたまふ御答へも聞こえたまはねば、日ごろの積もりを、さすがにさりげなくつらしと思しける、と心苦しければ、とかくこしらへ聞こえたまふ。（『源氏物語』 若菜・下巻④246頁）

この「心の鬼」は、「良心の呵責」であろう。今までから現在まで自分の世話をしてくれている源氏に対して、気後れするのは当然のことである。

前の場面でも、源氏は女三宮の見舞いにわざわざ訪れており、女三宮はそのことなども含めて源氏に申し訳ない気持ちを抱いていることが考えられる。そして、⑩の場面でも同じように、「良心の呵責」を覚えた心中を「心の鬼」として表現しているのではないだろうか。

また、「若菜・下」巻で、柏木から女三の宮への手紙を、源氏に見られたことを知った小侍従と女三の宮の会話の場面にも「心の鬼」は登場する。

- ⑫ 「いづくにかは置かせたまひてし。人々の参りしに、事あり顔に近くさぶらはじと、さばかりの忌をだに、**心の鬼**に避りはべしを。入らせたまひしほどは、すこしほど経はべりにしを、隠させたまひつらむとなむ思うたまへし」（『源氏物語』 若菜・下巻④251頁）

手紙をいい加減な所に置いておいた女三の宮を、小侍従は、自分が他の女房達にすら密通のことを気づかれないように慎重に立ち回っていたことを引き合いに出しながら、責めている。小侍従は、柏木との密通に手を貸しており、源氏に対する心中は女三宮とあまり変わらず、罪の意識に苛まれているとみられるため、この「心の鬼」は、「良心の呵責」であると考えられる。

同じ「柏木」巻には、病に伏している柏木のもとへ夕霧が見舞いに行き、会話をしている場面でも「心の鬼」が登場する。

- ⑬ 「いかなる御心の鬼にかは。さらにさやうなる御気色もなく、かく重りたまへるよしをも聞きおどろき嘆きたまふこと、限りなうこそ口惜しがり申したまふめりしか。など、かく思ふことあるにては、今まで残いたまひつらむ。こなたかなた明らめ申すべかりけるものを。いまは、言ふかひなしや」
（『源氏物語』 柏木巻④317頁）

女三の宮との密通が光源氏に知られて、そのことを源氏にほのめかされた柏木は体調を崩し寝込んでしまう。その病床に見舞いに來た夕霧の言葉である。この直前に柏木は、夕霧に対して、自分が源氏に許されていないことを打ち明ける。しかし、柏木は自分が何をしてしまったのかについて具体的に明言しておらず、夕霧も正確に把握はできていない。しかし、柏木は、夕霧に対しての長い告白の最後に、自分がしてしまったことを亡くなった後でも許してもらいたいと言っていた。その発言を聞いた夕霧の、柏木の「心の鬼」についての推察は、「良心の呵責」にあたるかと考えて良いだろう。「それはどのような良心の呵責なのでしょうか」と、当該部分は訳すことが可能ではないだろうか。

「柏木」の次の「横笛」巻では薫の扱いについて、源氏が悩んでいる場面がある。

- ⑭ 宮の若君は、宮たちの御列にはあるまじきぞかしと御心の中に思せど、なかなかその御心ばへを、母宮の、御心の鬼にや思ひよせたまふらんと、
（『源氏物語』 横笛巻④364頁）

薫は、臣下であるため皇子である他の子たちと同格に扱うことはできないが、そうすると、女三の宮の心の中に、薫は柏木との密通によって産まれた子であるからそのような扱いをするのだ、という気持ちが生まれるのを、源氏が危惧している。源氏が、女三の宮の「心の鬼」を推察しているものであり、女三の宮が柏木との密通を心苦しく思っていることをすでに知っている源氏は、女三の宮の「良心の呵責」を危惧していると考えて良いだろう。

次の用例は、「東屋」巻で、匂宮邸に妻として住む中の君（浮舟の異母姉）に預けられた浮舟に匂宮が接近した事件を知った中将の君（浮舟の母）が、中の君のもとを訪れた場面である。

- ⑮ 「いとさ言ふばかりの幼げさにはあらざめるを。うしろめたげに気色ばみたる御まかげこそわづらわしけれ」とて笑ひたまへるが、心恥づかしげなる御まみを見るも、**心の鬼**に恥づかしくぞおぼゆる。いかに思すらんと思へば、えもうち出できこえず。 （『源氏物語』 東屋巻⑥ 7 5 頁）

男女関係のいざこざは、身分の高さなど関係ないため、中の君がどのように思っているか、心配している様子がうかがえる。⑭の場面の中将の君の心理状態を考えるのであれば、「浮舟が起こした男女問題で中の君がどのように思っているか心配であったが、実際会ってみると笑って話す彼女の立派な目もとに、罪の意識に苛まれているのも相まって、気後れを感じてしまい、何を考えているか分からず、何も言えない」というように、解釈できないであろうか。

次の用例は、「蜻蛉」巻で、浮舟の死の真実を知っている右近と侍従の2人の女房が、そのことを隠そうとしている場面である。

- ⑯ ながらへては、誰にも、静やかに、ありしさまをも聞こえてん、ただ今は、悲しささめぬべきこと、ふと人づてに聞こしめさむは、なほいとほしかるべきことなるべし、とこの人二人ぞ、深く**心の鬼**添ひたれば、もて隠しける。 （『源氏物語』 蜻蛉巻⑥ 2 1 4 頁）

浮舟の死の原因は、薫との密通を手引きした自分たちの責任であり、薫が人伝に聞くのは気の毒であると「良心の呵責」が描かれている。

次の用例は、「蜻蛉」巻で、薫が、亡くなった浮舟のことを思い出している場面である。

- ⑰ これに思ひわびてさしつぎには、あさましくて亡せにし人の、いと心幼く、とどほるところなかりける軽々しさをば思ひながら、さすがにいみじと、ものを思ひ入りけんほど、わが気色例ならずと、**心の鬼**に嘆き沈みてゐたりけんありさまを聞きたまひしも、思ひ出でられつつ、重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を。 （『源氏物語』 蜻蛉巻⑥ 2 6 0 頁）

薫は、浮舟に対してあまり良い印象が無かったが、薫からの態度が変わったと

きに、「心の鬼」を感じて嘆いていたことを右近から聞くと、妻としてではなく、話し相手程度であれば良い人だったと考えている。匂宮と浮舟の密通を知った薫は、浮舟に対し、以下のような歌を送っている。

波こゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな

（『源氏物語』 浮舟巻⑥176～177頁）

密通のことを知ったことをほのめかすような内容を送り、浮舟を揺さぶる薫の意図がみられる。そして、実際に浮舟は罪の意識に苛まれ、精神的に追い込まれて最終的に入水に繋がる。その浮舟の心理は、同じく浮舟巻に描かれる。

- ・つひに、わが身はけしからずあやしくなりぬべきなめり（同・177頁）
- ・まろは、いかで死なばや、世づかず心憂かりける身かな、かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはある（同・181頁）

このような思考を持つようになった浮舟を近くで見てきた右近は、それが、浮舟の「心の鬼」によるものだと言う。匂宮との密通時から「良心の呵責」の感情を持ち始め、薫に知られたことでその気持ちが増大して、右近にも目で見て分かるようになっていたということであろう。浮舟の密通、心理描写を考えると、「良心の呵責」と解釈して良いだろう。

以上が『源氏物語』の15例である。

続いて、『浜松中納言物語』巻五の、中納言の心中が描かれた場面を確認する。

- ⑱ なほ迎へ取りて、いかなるさまなりとも、われ思ひあつかひてこそ、なほ朝夕おぼつかなからず見るに、心もなぐさまめと思ひつづくるに、なぐさむを、われはかく思ふとも、さすがなる心の鬼添ひ、まことのけ近き契りのかたに心寄り果てて、あらぬそぞろなる人ぞ、など教へたてられむこそ、いみじく口惜しう心憂かるべけれ。（『浜松中納言物語』巻五 413頁）

吉野の姫君が何者かに攫われたことを知った中納言の心中が表現されており、姫君を攫った者が、中納言はいい加減な者であることを姫君に伝えるのではないかということを知り、危惧している場面である。この「心の鬼」は、「疑心暗鬼」として解釈できるのではないだろうか。

ただし、この部分について、『新編日本古典文学全集』は中納言の「心の鬼」としているが、これは姫君の「心の鬼」と解釈したほうがよいのではないか。直

前の「われはかく思ふとも」という部分に注目すると、ここまでの心情が中納言のものであるため、「私はこのように思っている」と解釈でき、次の主語としては、姫君と考えるのが妥当である。また、この「心の鬼」の主語を中納言とすると、後文の姫君を主語とする「まことのけ近き契り……」との流れがおかしくなる。

この場面は、中納言が、本当に心が通じ合っていない姫君が、攫った者と一緒にいることで、中納言との関係に疑心暗鬼の念が出てきて、その者に心が傾いてしまうのではないかと、推測しているのだと考えられないだろうか。

したがって、この「心の鬼」は姫君の「疑心暗鬼」であると考えられる^[15]。

次の5例は、『夜の寝覚』の用例である。最初の用例は、巻一での、中納言(以下、「男君」と呼ぶ)と宮の中将の女性論の場面である。

- ①⑨ いといみじくうち嘆かれたまひぬる**心の鬼**に、「いかが思ひ寄らむ」とつつましき紛らはしに、「いとよくおぼし寄りけり。いろはず、残りなき御心とこそ聞き思ひつれ」と、うちほほゑみたまへば、「などてさはきこしめしけむ」など、かやうに、すずろごとを、とかく言ひ紛らはし明かいたまふ。
(『夜の寝覚』巻一 47頁)

宮の中将が、身分の低い女を見下すような発言をして、それに男君は同意している。しかし、男君は前に関係を持った但馬守の娘(実は太政大臣の次女の中の君で、この物語のヒロイン。以下、「寝覚めの上」)のことが頭から離れず、今でも恋しく思っている。そのような自分の気持ちで、「心の鬼」を生み、宮の中将にどのように思われるか気にしている。したがって、ここは「良心の呵責」を感じていると考えられる。

以下の用例は、巻一で、寝覚めの上が、自分が妊娠していることを誰かに気づかれるのではないかと、危惧している場面である。

- ②⑩ 「見咎めたまふ人もや」と、我が**心の鬼**に恐ろしくわりなければ、伏目のみおぼされて、人々の見たてまつりたまふをいと苦しくおぼさる。
(『夜の寝覚』巻一 82頁)

このときの寝覚めの上は、はっきり分かる程度にお腹が大きくなってしまっており、家族に会うのも憚られる状態である。これは、寝覚めの上の「疑心暗鬼」であると考えられる。

さらに、同じ巻一には、寝覚めの上の兄である宰相中将が、寝覚めの上の妊娠

を知り、彼女の様子を見に来た場面が描かれている。

- ② 我も、げに、この君の見たまはぬはおぼつかなく思ひならひにしを、身の心憂く恥づかしくなりにし後より、**心の鬼**に、そら恐ろしく恥づかしくのみおぼえて、さやかにも向かひたてまつることもなくて、月ごろになりにはけるも、いと悲しく、いとつつましけれど、沈み入らむも思ひぐまなければ、少し頭もたげたまへり。 （『夜の寢覚』巻一 115頁）

宰相中将の思いやり深い発言を聞いた寢覚めの上は、ありがたく感じているとともに、妊娠してからはろくに会えていなかったことを申し訳なく思う気持ちが出てきていた。つまり、この「心の鬼」は、兄に対する寢覚めの上の「良心の呵責」と解釈して良いだろう。

次の用例は、巻二で、広沢（現在の京都市右京区嵯峨広沢町あたり）で療養していた入道（かつての太政大臣、大君と寢覚めの上の父）の体調が回復したので、付き添っていた妻の大君を大納言となった男君が迎えに行ったことが描かれている場面である。

- ② 大納言は、左衛門督と一つ御車に乗りたまひて、留まりたまふ人の心苦しさを、道すがらおぼせど、**心の鬼**に、御消息をだにきこえたまはず。かひなき御仲らひなり。 （『夜の寢覚』巻二 161頁）

男君と大君は、用事が済んで帰ろうとするが、寢覚めの上はもうしばらく広沢に残り、父の面倒を見ることを決意する。そのような寢覚めの上に、男君は手紙の1つも送ることができない。これは、寢覚めの上の心苦しさを思っただけのことである。それはやはり、自分がしてしまった寢覚めの上との密通が原因となっていることが分かっており、「良心の呵責」が存在しているからであると言って良いだろう。

次の用例は、巻五で、内大臣となった男君と寢覚めの上が2人で話している場面である。

- ③ 「忍びそめはべりにし**心の鬼**は、尽きせずかたはらいたくのみおぼえはべるべきを、幼き人々の御ゆかり、かやうに立ち交じりきこえさせたるやうにてこそよからめ。身をも世をも思ひ知ること多くのみはべれば、例ざまに思ふこともはべるまじ」 （『夜の寢覚』巻五 504頁）

年を重ねて打ち解けて話している様子がこの辺りの2人の会話に表現されてい

る。「忍びそめはべりにし」とは、男君との密通を指し、それに対しての思いということで、「良心の呵責」と解釈して良いだろう。

最後に、『栄花物語』についても検討する。藤原頼通（992－1074、平安時代中期の公卿）の、北の方に対しての想いが描かれている場面である。

⑭ 御心の鬼に苦しく思さるるに、人知れず御胸騒がせたまふも、あやしう雄々しからぬ御心なりや。

（『栄花物語』② 卷十二たまのむらぎく 56頁～57頁）

禊子内親王（1003－1048、三条天皇の第2皇女）との結婚の話を持ち掛けられた藤原頼通が、未だに降嫁の件を北の方に話していないため、「御心の鬼」に苦しめられて、胸を騒がせている場面である。

頼通は、愛している北の方に対して、未だに何も明かせていないので、「良心の呵責」が生まれていると考えて良いだろう。

Ⅲ、まとめ

以上、中古散文作品における「心の鬼」の用例の全24例を見てきた。その結果、「疑心暗鬼」として解釈できるものが、9例（蜻蛉日記：①、枕草子：②、源氏物語：③・⑤・⑥・⑦・⑩、浜松中納言物語：⑱、夜の寝覚：⑳）、「良心の呵責」として解釈できるものが、15例（源氏物語：④・⑧・⑨・⑪・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・夜の寝覚：⑲・㉑・㉒・㉓、栄花物語：㉔）であった。

この傾向を見ると、「良心の呵責」のほうが「疑心暗鬼」より多いが、「疑心暗鬼」の意味もそれなりに存在する。また、作品によって偏っているということではなかった。ただし、②⑫などを含めて、2つの意味で解釈に悩む例が複数あった。「心の鬼」は中古文学において、人の心情を表す重要な語である。この意味を一義的に解釈しようとするものもあれば、複数の意味が併存するという考え方も多くあった。基本的な方向性としては、「疑心暗鬼」と「良心の呵責」という意味である。「疑心暗鬼」とは、不安感や恐れが根底にあるなかで、他者に疑いを抱く心の働き。実際とは異なる、邪推の意味でもある。一方、「良心の呵責」は、自分の価値観に照らし合わせて、善悪をはかる心の働き。多くは、負い目などからやましさを覚えることなどである。一見、似たような意味であるが、方向性がやや異なる。疑心暗鬼とは、内心で他者に疑いを向けること。良心の呵責は、内心で自分にやましさを覚えること。中古文学における重要な心情表現である「心の鬼」が、どのような意味で用いられてきたのか、またそこに他者や作品ごとによる傾向はあるのかということの本稿では検討した。今後は、より作品を読み込んで確実な判断の証拠となる部分を探す必要があると考える。

注

- [1] 『日本国語大辞典 第二版』（小学館 2000～2002年）、以下、『日本国語大辞典』と略す。
- [2] 『玉勝間』巻三（『本居宣長全集』吉川弘文館、1978年所収）
- [3] 「心の鬼」という語の研究史については、湯浅幸代『『源氏物語』の「心の鬼」一鬼の表現をめぐる一』（『古代学研究所紀要』27号 2019年2月）に詳しい。
- [4] 田中貴子「『心の鬼』考」（『池坊短期大学紀要』第21号 1990年3月）
- [5] 森正人（「心の鬼の本義（承前）」（『文学』第2巻5号 2001年9・10月）
- [6] 赤間恵都子「『心の鬼』の解釈について—王朝文学の心情表現—」（『十文字国文／十文字学園女子大学短期大学部国語国文学会編』18号 2012年3月）
- [7] 杉浦和子「源氏物語における「心の鬼」—「人を責める鬼」から「己を責める鬼」の物語へ—」（『上智大学文化交渉学研究』1号 2013年3月）
- [8] 井内健太『『源氏物語』藤壺の密通における「心の鬼」について』（『国語と国文学／東京大学国語国文学会編』93巻8号 2016年8月）
- [9] 佐藤雅代「『心の鬼』考—歌言葉としての一側面—」（『文芸研究 明治大学文学部紀要／明治大学文芸研究会編』126号 2015年3月）
- [10] 引用は全作品、『新編日本古典文学全集』（小学館）を使用した。各作品の書誌情報は以下の通りである。
- ・『蜻蛉日記』菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久（1995年）
 - ・『枕草子』松尾聰・永井和子（1997年）
 - ・『源氏物語①～⑥』阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（1994年～1998年）
 - ・『浜松中納言物語』池田利夫（2001年）
 - ・『夜の寝覚』鈴木一雄（1996年）
 - ・『栄花物語②』山中裕・秋山虔・池田直隆・福長進（1996年）
- [11] 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集 枕草子』（小学館1997年）
- [12] 注5に同じ。
- [13] 注6に同じ。
- [14] 注3に同じ。
- [15] 池田利夫『新編日本古典文学全集 浜松中納言物語』（小学館 2001年）の注では、この「心の鬼」について、「自らの心をとがめ、さいなむもの。ここは疑心暗鬼の意とし、そうは言ってもさらに「心の鬼添ひ」と解したが、「われは」に対して「女は、さすがなる心の鬼添ひ」の文脈であれば、女によこしまな心の意となろう」としている。つまり、中納言に宿った「心の鬼」を「疑心暗鬼」として解釈し、仮に「女」に宿ったものだとすると、「よこしまな心」の解釈になることを示唆している。しかし、本稿では、この「心の鬼」は、姫君に宿ったものでありつつ、「疑心暗鬼」の意であると解釈する。

中古文学に見られる「心の鬼」（鈴木健太郎）

その他の参考文献

- ・ 増田繁夫「古代的世界に生きる光源氏」（『国文学 解釈と教材の研究』第38巻 11号 1993年10月）
- ・ 針本正行「『源氏物語』「物の気」顕現と「心の鬼」」（『國學院雑誌』109巻10号 2008年10月）

（すずき けんたろう・修士課程1年）